

梁田蛻巖の「九日」詩

中島貴奈

はじめに

梁田蛻巖詩のなかで最も有名な作の一つに数えられるものに、七言絶句「九日」がある。江戸詩人選集第二巻『梁田蛻巖・秋山玉山』（岩波書店、一九九二年）に収める、徳田武氏による訓読と訳とを次に掲げる。

琪樹連雲秋色飛　　琪樹　雲に連りて　秋色飛ぶ
獨憐細菊近荊扉　　獨り憐れむ

登高能賦今誰是　　細菊　荊扉に近きを
 高きに登りて　能く賦す

海内文章落布衣　　海内の文章　布衣に落つ

秋の気配が急速に深まるなか、緑の美しい木が雲に

までそびえたっている。しかし私は我が陋屋のそばの小菊の方をひたすら好ましく思う。山に登って詩を賦することができる者は今の士大夫の中に誰がいようか、誰もおるまい。日の本を代表する詩文は無官のこの私にしか作れないのだから。

転句の「登高能賦」は、『漢書』芸文志に「登高能賦、可以爲大夫」とあるに基づき、高みに登って詩賦を作る才能が、士大夫に欠かせない資格であることをいう。

前掲書注には作詩の背景について、

題注に「元禄中、東都に在るの作」とあり、元禄四・五年から九年（二十歳から二十五歳）頃までの浪人中に作ったもの、と推定される。時に、徳川幕府の大学頭である林鳳岡に入門を求めたが、成就しなかった（解説参照）^二。自分を受け入れなかった官学への憤懣と自己の才能への自恃とを託した、私に

関する懷抱を詠じた作品であるが、人々によく知られ、松村梅岡のように、（後掲―引用者注）と、文学史的現象を詠じた作、と解する者もいた。

と述べる。徳田氏の解釈は、緻密な伝記研究に基づき、制作当時の蛻巖の具体的状況と詩の内容とを合致させたものである。少しさかのぼると、猪口篤志氏も新釈漢文大系45『日本漢詩』上（明治書院、一九七二年）において「九日」詩をとりあげ、「この詩は『海内の文柄は我に在り』との自負を示した」と述べたうえで、三四句を「思えば今日は九月九日、重陽の節句である。昔から高い処に登って詩を作るならわしであるが、古書にも『うまく作れば大夫となる資格がある』といっている。今日果たして誰がそれに相当しているであろうか。海内の詩文は民間人の手に落ちていくようだ。」と訳出する。起・承句を単なる叙景とせず、「第一句は世に時めく学者にたとえ、第二句は自分にたとえた」と、寓意を読みとる点も徳田氏と同様であるが、作られた背景については触れていない。

このような一連の解釈を明確に示したものとしては、『梁田蛻巖全集』^(三)の編者である梁田忠山氏が同全集緒言において

抑、江戸時代ハ……所謂保守的繼承的ノ文學ナリシガ、自由進取ノ氣概ニ富ミタル家祖ハ、先人ヲ模擬

スルヨリモ、自己ヲ發表スルヲ可トシ、革命的進取的ナル一般平民ノ手ニ落チントスル、時代文運ノ先驅者トシテ、九日ノ作ニ喝破シテ曰ク（「九日」詩を引く―引用者注）ト、其抱負ノ一斑ヲ見ルベシ

としたのが初めてであろう。詩全体の解釈としては大きく違わないのだが、作詩の契機を蛻巖個人の中だけでなく「一般平民ノ手ニ落チントスル」文運の変遷にまで結びつけているのであり、「私に関する懷抱を詠じた」とする前掲の解釈には、僅かではあるが、ずれが生じているのである。

そもそも「九日」詩は、蛻巖の数ある作品中の一つに過ぎない。「詠雪」詩のような大作が評価されることにはすくにも首肯できるが、なぜ「九日」詩がとりわけ注目されるに至ったのだろうか。限られた資料の中ではあるが、以下蛻巖「九日」詩の受容について考察したい。

一 当時の「九日」詩評価

元禄四年から九年頃（一六九一―一六九六）に作られたと推測されるこの詩は、まず新井白石の編んだ『停雲集』（享保三年、一七一八初版）^(三)に収められた。この集では第二句を「獨憐細菊夕陽扉」につくっており^(四)、制作年との近さから、おそらく推敲前の形をのこすもの

と推察できる。白石周辺の人物二十四名の作品二百六十一首を収めるこの選集に十三首選ばれていることは、蛻巖の詩才に対する白石の評価を窺わせるが、白石が「九日」詩に徳田氏の述べる如く具体的な官学批判を読みとった上で選出していたとは考え難く、当時（少なくとも白石に）「官学への憤懣」を託した作と解されていたかについては、むしろ疑問がのこる。

以後、蛻巖の生前「九日」詩に言及する資料としては、年代は不明であるが『蛻巖集後編』巻七に収める山脇東洋宛書牘中に、

云ふ所の九日の詩は、元禄中江東に在りし時の作なり
(原漢文)

とあるものがあげられる。おそらくどこかで「九日」詩を目にした東洋が賞賛してきたものと察せられ、当時の評価を窺わせはするが、それに対する蛻巖の答えは実にあつさりしたもので、ここに特別な思い入れを読みとることはできない。

蛻巖自身によるものとしては、「蛻巖八十六書」とある「九日」詩一幅が現存する^(五)。「東京遺墨展覧会出品目録」^(六)によると、蛻巖自筆の「九日」詩がもう一幅伝存するということであるが、遺墨に占める割合としては、決して多くはない。

また、やや時代が下るが、兄弟の清田儋叟、伊藤錦里

とともに晩年の蛻巖と交遊のあった江村北海は『日本詩史』(明和七年、一七七〇自序)^(七)で「天才巧妙、前に古人無く、後に継ぐもの無し」「今その集を読むに、譬へば猶ほ崑崙の邱に上り、歩歩これ玉、梅檀の林に入り、枝枝これ香なるがごとし」と絶賛する。しかし取りあげる詩は「不能買書」「詠雪」「題藤元琰水尋艸後」のみであり、同じく北海編の『日本詩選』(安永二年、一七七三自序)^(八)も蛻巖の詩二十七首を収めるが、七言絶句五首の中に「九日」詩は入っていない。

このように、後世の喧伝ぶりに比べると、当時においてはあまり顧みられていなかったようである。資料が少ないせいもあるのだろうが、詩を以て親しく交わった清田儋叟などにも言及が見られないことは不思議である。

二 詩解釈の広がり

「九日」詩を取りあげ、さらにそれについて論じた早い例は、徳田氏が前掲注に引く松村梅岡の『駒谷芻言』^(九)である。該当箇所を、やや長くなるがそのまま掲げると、以下の通りである。

我邦、文雅ノ盛ナリシハ、宝永、正徳ノ間也、天子ヨリ、親王公卿列侯、皆々詩文ヲ好タマフ、頃彦山勝景詩集ト云モノヲ見シニ、十冊バカリアリ、親王

公卿以下、諸侯武家林家ノ人々、禄位アル人二百人
ニ及ベリ、布草僧徒三百人ニ近シ、多クハ順庵、白
石、東涯ニ從フ人々也、徂徠家、元文ヨリ今ニ至マ
デヲ、文盛也ト云ハ、己ガ田ヘ水ヲ引也、享保ヨリ
文雅草莽ニ下タリ、有識ノ士是ヲ前知セルニヤ、赤
石蛻巖先生有詩曰、登高作賦今誰是、海内文章落布
衣、俊杰先見ノ明、恐ベキニ非ヤ、民間ニバカリ文
アルハ、文ノ衰也、無位無官ノモノ詩文作ルハ、虫
ノ草間ニ吟ズル也、ソレサヘ、近年傑出ノモノ無ハ、
枯草ノ虫、霜枯ノ音ト云ベシ（傍線引用者）

徳田氏は「文学史的現象を詠じた作、と解する者」と
だけ説明するのだが、ここには近年の解釈との、大きな
懸隔がみとめられるのではないだろうか。つまり松村梅
岡は、「海内の文章」が「布衣に落」ちることを「草莽
ニ下」り、「民間ニバカリ文アルハ、文ノ衰也」と否定
的に見ているのであり、「布衣」に蛻巖は含まれないば
かりか、むしろ相対するものとしてとらえているのであ
る。松村梅岡は高野蘭亭の門人であり、護國の流れを汲
むといつてよい。しかしながら『駒谷鋸言』の別の部分
においても

戯二国初以来、今マデノ詩ノ品彙ヲ定ンニハ、国初
ヨリ天和、貞享マデヲ正始トス。初唐ニ擬ス。元禄、
正徳ヲ正宗トス。盛唐ニ当ル。享保以下ヲ接武トス。

中唐ニ準ズ。安永、天明ヲ余響トス。晩唐ニ比ス。
世人南郭ヲ、正宗ノ如ク云ハ、見識ナキ詭人随人也。

（傍線引用者）

享保は元禄、正徳を継承したに過ぎない、と述べるよう
に、「正徳」つまり新井白石中心の時代を文盛の至りと
みていることはたしかである。

梅岡のように解することも十分可能であるし、またそ
う読まれたことによつてこの詩が流布していったと考え
ることもできよう。

さらに、これだけであれば梅岡ひとりの異説として片
付けられようが、その後、刊本も多く存する『仮名世説』
下（文化七年、一八一〇序）にも引かれており、や
はり注目されるのである。

品藻補 此御国文雅の盛なりしは宝永、正徳の間なり。

享保の中此より文雅草莽に下たり、有職の士、是を
前知せるにや。赤石蛻岩先生の詩に、登高作賦今誰
是、海内文章落布衣と。俊述先見の明恐るべきにあ
らずや。民間にばかり文あらば文衰也。それさへ近
年傑出の者なし。枯草の虫、霜枯の音といふべしと、
ある人申き。

『大田南畝全集』の解説によれば、『仮名世説』の項
目のうち「文学補」「品藻補」など「補」のつくものは
すべて、序文を書いた山崎美成か、跋文を付した文宝亭

文宝による後補であるという。人物評を伝える「品藻」に分類することからしても、文雅の変遷や蛻巖の詩の解釈よりは、文雅の衰えを「前知」した蛻巖の「先見の明」に注目してとりあげているのであろう。しかし梅岡の説に全く異を唱えることなく引用していることから、こうした解釈をともなった「九日」詩（あるいは転・結句のみであろうか）の流布も、一部には存在したことが窺えるのである。

梅岡の例はやや早いように感じられるが、実際詩作は一般人の間に広まりつつあった。右の二つは実際の時代の趨勢に重ね合わせて「九日」詩を解した例といえるだろう。なお『駒谷芻言』とほぼ同時期のこととして、寛政四（一七九二）年の序をもつ（京都大学附属図書館蔵の所見本は文化四年版）源世昭編『日本詩鈔』にも「九日」詩を収めることを指摘しておく。

しかしながら、『駒谷芻言』や『仮名世説』のように転・結句を解釈した場合、起・承句に寓意をよみとることは無理である。つまり「天高くそびえる美しい木々と、ひっそりと咲いている菊」という叙景にとるよりなく、前後聯のつながりや詩全体が浅薄なものになってしまふ。やはり「琪樹―登高（士大夫）」と「細菊―布衣」という対比は、最小限読みとらなくてはならず、「細菊」にこころを寄せるように、蛻巖の思いは「布衣」の側に

あると見るべきである。

三 頼山陽「論詩絶句」

頼山陽が蛻巖を慕っていたことは、「追慕蛻巖先生」と題する一詩によってよく知られている^二が、文政十（一八二七）年頼山陽は「論詩絶句」其十二に蛻巖の「九日」詩を詠み込んでいる。

海内文章落布衣	海内の文章	布衣に落つ
偶然七字是珠璣	偶然の七字	是れ 珠璣
登高唯有梁翁賦	登高	唯だ有り 梁翁の賦
解道連雲秋色飛	解く道ふ	

原注には「梁蛻巖^{マヤ}九日詩曰、琪樹連雲秋色飛、獨憐細菊^{マヤ}傍荊扉、登高作賦今誰是、海内文章落布衣、結句蓋他人作、蛻巖^{マヤ}乞得足之成一篇云」とある。つまり結句は元々蛻巖自身の手になるものではなく、他人から「乞得」した句であり、そこに前三句を足して一詩を成したと言ふのである。

「九日」詩に関するこのような説は他にはみられないが、まったくの山陽の創作でもないだろう。詩とともに言い伝えられていたものだろうと思うが、それならばこれより以前に、どこかに書き留められていてよいように

も思われる。真偽の如何によつて詩の解釈も変わつてくるわけだが、ここではひとまず、少なくとも山陽はそう解していた、として読むよりないであろう。

結句の「解道」は、例えば李白の「金陵城西樓月下吟」に「解道澄江淨如練、令人長憶謝玄暉」と、謝玄暉「晚登三山還望京邑」（『文選』二十七）の「澄江靜如練」をそのまま引くように、古人の名句を引用する際に用いられる。「言い得たり」の意であろう。

転句の、表面上の意は「登高の詩では蛻巖の『九日』詩が最も優れている」であり、結句で具体的に「連雲秋色飛」という表現を賞賛していると解せる。が、やはりこの転句も「九日」詩の転句「登高能賦今誰是」に呼応して「唯有梁翁賦」と言っていると考えたい。つまり「登高」は単なる重陽の「登高」ではなく、蛻巖の詩で「登高能賦」という士大夫の資格までも指し、それに相応するのは「唯だ梁翁の賦があるのみ」というのである。もちろんそこには「九日」詩も含まれる。

次に山陽詩の試訳を掲げる。

「海内の文章布衣に落つ」という、偶然の一句が名句となった。士大夫でありかつ詩を善くした作としては蛻巖の名詩があるのみである。

言い得ている、「（美しい木々が）雲にとどくまで高くそびえ、秋の気が高い」と。

「九日」詩の起句の「秋色飛」を、徳田氏は「飛舟」などのように「飛」を「速い」意にとり、「秋の気配が急速に深ま」ることを言うとする。しかし木々が雲に連なつて「高く」そびえる、という表現とのつながりを考え、秋の気が高いことを言うかと解しておく。

だが、山陽が「海内文章落布衣」をどのように解して「珠璣」と評しているのかについては分明ではない。そもそも「九日」詩の解釈が幅を持つ原因は、先に触れた松村梅岡の例からも明らかのように、山陽の引く「海内の文章布衣に落つ」一句の解釈にあり、さらに言えば問題は「布衣」の語に収斂されるだろう。松村梅岡が単に「民間」としていたのに対し、近年の解釈では「自己の才能への自恃」を託した、「無官のこの私」（徳田氏）と、蛻巖の強い自負の込められた語と取るのである。以下、「布衣」の語について少しく検討する。

四 「布衣」について

「布衣」（「韋布」、あるいは「布韋」とも）は文字通り木綿の衣の意、転じて庶民、無位無官の士を指す。とはいえ実際の「庶民」を指して「布衣」ということは稀であり、才能を持ちながら官に就けずにいる者が、本来庶民を指す語である「布衣」を用いて自己を称する所に

自負や卑下の意が生ずるのである。また、詩の中ではたとえ官職に就いていても自らを指して用いることがあるため、「布衣」の語だけを以て「九日」詩を元禄中、失職していた際の作と断定するのは性急である。

当面問題となるのは、まず「布衣」の語に価値を付与するかどうか、ということである。先の松村梅岡のような解釈の場合、文章が「布衣」のものになったことを否定的に見ていたのであるから、「布衣」はそこに積極的意味を持たない。一方近年の解釈では、文章の才能によって価値を持ち得る「庶民」となるのである。

もう一点は、価値を付与した「庶民」と取る場合、そこにどれだけ自己（蛻巖）が含まれるか、ということである。近年の解釈においても徳田氏が「布衣」すなわち「この私」とするのと、梁田忠山氏が「革命的進取的ナル一般平民ノ手ニ落チントスル、時代文運ノ先驅者」とするのは、前者における蛻巖の比重の高さは明らかである。

まず蛻巖についていえば、詩のなかで「布衣」の語を用いた例は他には見られない。実際無官であったと推測される時期の作品が多くは残らないため、やむを得ないことだろうか。文章中では「享保四年作」という注を付す書牘「松浦霞沼に寄す」（『蛻巖集後編』巻七）に

正徳中、子韓使に従ひて鴻臚に在り、此の時に当り

て、余落魄已に甚だし、布韋を整へて以て觀光すること能はず
（原漢文）

とあるのみである。正徳の通信使は元（一七一）年十月に江戸に到着しているから、その際のことであろうか。宝永三年に加納藩を致仕した後、正徳年間の蛻巖は貧窮の中にあつた。「詠雪」詩を作つたのも正徳三年のことである。ここでは朝鮮通信使に従つて江戸城に至つた霞沼に対し、「衣服を整えて」と言っているのでむしろ原義に近い用例であり、そこに自負を読みとることはできない。

では、蛻巖とほぼ同時代の詩人の作についてはどうであろうか。結論から言えば、用例は大きく

①「布衣交」「布衣遊」（貧しい頃の交わり。多く高位についても無官の頃の交わりを忘れない意に用いる）のように、決まつた表現で用いられるもの。

②諸侯などの貴人に贈る詩に限って自分、あるいは自分を含む一般人を指しているもの。

に分類されると言つてよい。なお②の用例の多くは、相手を『史記』巻七十七に伝のある「魏公子」に比す。魏公子無忌は魏の昭王の子で、信陵君に封ぜられた。人となり仁にして、身分の上下を問わず士に接したため、食客三千人をかかえたという。ただし、①と②両者の要素

を備えた例も見受けられる。

管見に入つた用例数はそれほど多くはないが、いくつか例を挙げて考察する^(二四)。まずは秋生徂徠の例。

古來能爲布衣游 古來能く布衣の游を爲すは
魏有信陵今豫侯 魏に信陵有り 今予侯

〔「猗蘭君侯將之國就別予草堂賦此奉饌」

『徂徠集』卷一〕

これは「布衣游」を用い、かつ本多猗蘭を信陵君に喩えたものであるから、①②を兼ねた例であるといえよう。次は蛻庵と交遊のあつた、室鳩巢と高野蘭亭の例である。

獨有井家今夜宴 独り井家今夜の宴有り
年年猶爲布衣遊 年年猶ほ爲す 布衣の遊

〔「觀白石仲秋詩有感五首之二」『後編鳩巢文集』卷二〕

憶君昔許布衣交

憶ふ君が昔

布衣の交わりを許すを

撫膺一哭淚縱橫

膺を撫して一哭 淚縱橫

〔「哭土準夫」『蘭亭先生詩集』卷二〕

ともに①の例に入るが、前者は徂徠詩同様、②の要素も含んでいるだろう。「土準夫」とは土屋繩直のこと。蘭亭からもう一例と、服部南郭の例をみる。

儻念東方一布衣

儻し東方の一布衣を念はば

鴻雁秋來寄所思

鴻雁秋に來たりて所思を寄せよ

〔「奉送宇土藩侯歸藩」『蘭亭先生詩集』卷二〕

受客魏公子 客を受く魏の公子

無嫌接布衣 布衣に接するを嫌はず

〔「春雨集豹隱亭得衣字」『南郭先生文集四編』卷一〕

南郭詩の詩題にある「豹隱亭」は、豹隱公子、細川藩主松平乗昌の子乗富の亭の名だろうか^(二五)。いずれも②の例に入り、蘭亭詩の「一布衣」は蘭亭ひとりを指している。また、松村梅岡と同じく蘭亭の門人であつた松崎觀海の用例も

共美懸車高臥地 共に美とす 懸車 高臥の地
剪燈偏盡布衣歡 灯を剪りて偏に尽くす

布衣の歡

〔「春夜同島公恭陪關源二大夫宴成君宅」

『觀海先生集』卷二〕

布衣十日平原飲 布衣 十日 平原の飲

飛蓋千年鄴下遊 飛蓋 千年 鄴下の遊

〔「暮秋松山世子池亭同劉文翼賦」『同』卷四〕

のように、②に収まる。「松山世子」は鶴岡藩支藩琢玉公のこと。「平原」は「魏公子」同様食客を多く抱えた戦国時代の「平原君」をいう。

以上の範疇からやや外れる例として、まず鳩巢の一絶句を掲げる。

進善之旗誹謗木	進善の旗	誹謗の木
四方書疏自相依	四方の書疏	自づから相依る
春來寄語青雲士	春來	語を寄す 青雲の士
莫使讜言落布衣	讜言をして布衣に	

落とさしむること莫かれ

〔新年偶作十二首〕其十二『後編鳩巢文集』卷二）
「落布衣」という表現もあまり例を見ないため注目されるのだが、重要なのは内容である。「誹謗木」は政治への不満を書かせるため立てる木のことであり、「進善之旗」は人民が善言を奉る際にしるしとする旗だという。『史記』卷十孝文本本紀に「古之治天下、朝有進善之旗、誹謗之木、所以通治道而來諫者」と、ともに見える。そのようにして四方から集まった「讜言」を、しかし「布衣」のものにしてはいけない、本来「青雲士」に属するものなのだ、というのが大意であろう。素直に解するなら「一般庶民の手に」ということになるが、「九日」詩同様、「青雲士」への批判ととれないこともなく、明らかに先の用例と異なる。

また、平野金華には、

由來窮巷論交地	由來	窮巷	交わりを論ずる地
梁甫須堪終布衣	梁甫	須べからく	

布衣に終はるに堪ふべし
（『送東壁之相州』『金華稿刪』卷二）
とある。東壁は安藤東野。「終布衣」という表現はおそらく魏の阮籍「詠懷詩十七首」其八（『文選』卷二十三）に、

布衣可終身	布衣	身を終ふべし
寵祿豈足頼	寵祿	豈に頼むに足らんや

とあるのに基づく。阮籍の詩では、「布衣」は頼みにならない榮寵や祿位と対比され、そこに価値をもったものとして用いられている。「梁甫」は「梁甫吟」を好んで口ずさんだ諸葛亮をいうだろう。「元來陋巷こそが交わりを深めるのにふさわしい場所である。諸葛亮のような才能豊かなあなたではあるが、在野で身を終えるべきでしょう」と。つまり相手を慰めるためのものであり、また阮籍詩の表現を用いてはいるが、ここでの「布衣」もまたこれまでと異なり、そこに明確な価値を置く用例であるといえる。

以上見てきたように、同時代における「布衣」の語は大半が①②に分類されるような、決まった表現、或いは特定の条件下における使用であった。そのような場合「布衣」の意味は明確で軽いものであり、松村梅岡は「九日」詩にもこうした用例から得られる「布衣」の意を当てはめて解していたと考えられよう。

一方例外として掲げた二詩のように用いられる場合は、「布衣」の語の逆説的な要素や多義性が浮かび上がり、複雑なものとなってくる。こうした例は前者に比すると稀少ではあるが、「九日」詩の「布衣」も後者に属するものとして捉えなくてはならない。さらに、その「布衣」にどれだけ蛻巖が含まれるかということであるが、金華、鳩巢の例における「布衣」は、（阮籍詩を踏まえて）「禄位」や「青雲士」との対比において価値を持つものであり、その指すところは広かった。蛻巖の「九日」詩においても「布衣」をすなわち「この私」、蛻巖一人とらなくとも、転句に込められた批判性は失われないのではないだろうか。つまり「海内文章落布衣」は「登高能賦」の人物がいけない、ということを強調する裏返し表現であり、「布衣」の語は「登高能賦」の対としての「自己を含めた無位無官の人々」という意に取るのが妥当であると考ええる。

やや下って、実際「無官」となった詩人たちについて用例を見るとどうであろうか。梁川星巖の詩では、

共喜聖朝恩渥遍 共に喜ぶ聖朝恩渥の遍きを
布章溢得近櫻宸 布章 溢に櫻宸に

（正月十九日上御南殿閱樂舞令士民縱觀緯亦造焉
近づくことを得たり

窃賦長句以紀盛事』『星巖丙集』卷二）

白頭感泣公休怪

白頭感泣す

公怪しむことを休めよ

天下誰人重布衣

天下誰が人が布衣を重んぜん

（『呈羽林中郎將津山侯』『星巖丁集』卷五）（二六）

と、詩題から察せられるようにいずれも②の条件に当てはまるものであり、用例数もやはり少ない。一方山陽には「論詩絕句」の他に二例みえる。いずれも『山陽詩鈔』『山陽遺稿』には収められない作であるが、一つは

多君記舊猶相問

多とす 君が旧を記して

猶ほ相問ふを

黄葉山前一布衣

黄葉山前の一布衣

（『大田大幹東役來過賦謝』『頼山陽詩集』卷六）

であり、もう一例は

寧恨裔孫落草布

寧ぞ恨みん

裔孫の韋布に落つるを

山林長與赤松遊

山林 長へに赤松と遊ばん

（『播人有竹中君維親半兵衛重治之遠青

好國史及和歌介人索詩賦贈』『頼山陽詩集』卷廿三）

である。「半兵衛」とあるのは竹中重治のこと。戦国時代の名武將に比しての「布衣」であるから、前者と共にやはり②の例に入るとも考え得る。

しかしながら、星巖の「天下誰が人が布衣を重んぜん」

という一句、そしてより明確なものとして山陽の（「仙人の赤松子の遊に従う」という全く別の価値を持ち出すところにいささか戯れの感はあるものの）「子孫が一庶民になってしまったからといって、どうして恨みに思うことがありましようか」という表現はやはり、これまでの②の例とは異なり、「布衣」に価値を見出していくものであるといえよう。

以上のことをふまえて山陽の「論詩絶句」に戻る。「論詩絶句」においても、山陽が「布衣」に蛻巖の強い自負までを読みとっていたとすると、どうしても転句に「登高唯有梁翁賦」ということとの整合性を欠いてしまうように思われる。「かつて『今（士大夫の立場にあり、詩文を善くするものがあるだろうか）国の文柄は、（わたしたち）庶民の手に渡った』と見事に詠まれましたが、実際（官位についてなお）詩文を善くした人は、あなたがいたではありませんか」と、「九日」詩の転句からのつながりを視野に入れて読むと「論詩絶句」は解しやすいうように思われる。

五 『薦藻集』中の作

安政四（一八五七）年、蛻巖の百回忌にあたるこの年に、蛻巖から数えて六代目にあたる梁田邦恕が四方に詩

を募った。寄せられた詩を編んだものが、『薦藻集』上巻である。その間の事情は、たとえば小野湖山の集中に「蛻巖梁田先生一百年忌辰、玄孫仲容君来索詩、且見示山陽頼翁追懷先生詩、其推尊至矣、因次其韻作二絶」とあることからも知られる。その他梁川星巖、大沼枕山、鷺津毅堂といった有名詩人が並び、多くが前掲の山陽の絶句「追慕蛻巖先生」に次韻した作であるが、明らかに「九日」詩をふまえたと思われるものは多くない。さらに明治十五年、百二十五回忌に当たって邦恕の子邦彦により、同様の集が編まれた。それが『薦藻集』下である。上同様山陽の詩に次韻した詩がほとんどであるが、その中には「九日」詩をふまえたものはいくつか見える。大沼枕山の作を見る。

江湖昔日唱唐風 江湖 昔日 唐風を唱へ

明石灣波映筆虹 明石灣波 筆虹映す

誦叟佳篇供叟祭 叟が佳篇を誦して叟が祭に供す

文章只在布衣中 文章只だ在り 布衣の中

先に蛻巖と同時代、そして山陽の頃に至っても「布衣」の語の使用に少しく制限があることについて述べた。しかしながら、枕山においてはやや異なる。枕山詩における全用例数は五例と多くないのだが、そのうちの二例に注目したい。

問梅尋柳博朝賀 梅を問ひ柳を尋ね 朝賀博し

自覺布衣身更尊

自ら覚ゆ 布衣の身更に尊きを

（「元日」『枕山詩鈔』下）

長安厚祿故人存

長安厚祿の故人存す

貧我布衣寧說尊

貧我 布衣 寧々尊を説かん

（「歲晚雜述」『枕山詩鈔三編』下）

いずれも「布衣尊」という形で用いており、詩題からも判るように特定の条件下での作ではない。これは南宋陸游の詩句に、

痛飲每思尊酒窄

痛飲 毎に尊酒の窄きを思ひ

微官空羨布衣尊

微官空しく羨む 布衣の尊きを

（「東園晚歩」『劍南詩稿』卷五）

貧知蔬食美

貧にして知る 蔬食の美

閑覺布衣尊

閑に覚ゆ 布衣の尊きを

（「書況」『劍南詩稿』卷七十三）

とあるものに基づこう（二九）。前者は淳熙元年、官に就いて蜀州にあつての作であり、ここでは「布衣尊」を羨む立場で詠んでいる。後者は致仕した後開禧三年、山陰での作であり、「布衣」は陸游自身を指す。陸游は「布衣」の語を多用しているため全体を通観した検討が必要であるろうが、ひとまず二例についてみると、ここで詠まれるのは日常生活の中における「布衣」であることの喜びで

あり、前のように対立する価値との対比は明確ではない。したがってそこに自負を見出すことはできないが、「布衣」の語がそれだけで価値を持ち得ていることは、明らかであろう。つまり、枕山の詩は次韻詩であるから嚴密なことは言えないのであるが、「文章只在布衣中」の一句からも窺えるように、枕山は「海内文章落布衣」を決して否定的な意味には解さなかつたはずである。

だが一方で、やはりまだ解釈の揺れを窺わせるような例も見られる。枕山同様山陽の絶句に次韻した、明石松平家の十代目にあたる松平直致（まつらひ ちかひ）（明治二年〜四年就任）の作である。

追懷當日欽英風

当日を追懷して 英風を欽ぶ

尚見遺篇氣吐虹

尚ほ見る 遺篇の気虹を吐くを

堪憾先生仙去後

憾するに堪へたり先生仙去の後

文章忽落布衣中

文章 忽ち落つ 布衣の中

結句は、単に「九日」詩中の表現だけを借りて為政者の中に詩作を善くするものが無くなったことを言うのかも知れない。しかし「九日」詩の内容をふまえて転・結句を解するとしたら、「（蛻巖は「登高能賦今誰是」と詠んだが、）まさにその才を持つ蛻巖亡き後、文章が（蛻巖のことば通り）たちまち民間人の手に落ちてしまった」ことは「じつに憾むべきことである」と、むしろ松村梅岡らに近い解釈をしていたとも考え得るのである。藩主

という立場を考慮するならば、その方が自然であったのかもしれない。

まとめ

見てきたように蛻巖の「九日」詩は、その解釈に広がりをもたせたままに、流布していった。「海内文章落布衣」という一句が様々な解釈を容れる、幅をもった表現であり、各々が自己に引きつけて読むことができたことも、詩の流布に与っていたと考えられる。

近世、明治の漢詩文を読むに際しては、中国の詩人の作同様、先行する本邦の詩の影響についても看過することはできないことを示す、一例なのではないだろうか。

なお『蘆藻集』には詩と同様にして集められた、画の題も載せられている。それによると、明治十五年に寄せられた画のなかには、「蛻巖先生布衣讀書圖」と題する、富岡鉄斎の作があったという^(三)。鉄斎の画の存否は不明であるが、ここにも「蛻巖〱布衣」というイメージの定着が窺われる。

〈注〉

(一) 解説に「九日」詩を詠じた背景について、

元禄四（一六九一）年七月、二十歳になった蛻巖は、

詩田定行の推薦によって北陸の雄藩加賀藩の前田侯綱紀に謁見した。藩儒として月に百人扶持または三百石の俸禄でかかえるという内約束が、詩田定行と藩の留守居役津田某との間にでき、それが家老の多賀信濃にも通知されていたからだった。しかし、その後二年間も蛻巖は放置されており、同六年になって呈示された条件は、月俸十人扶持に毎年の学資金三十兩という、初めの約束に甚だ劣るものであった。そこで多額の負債をかかえていた蛻巖は、致仕した。その後は、彼は兄の毅斎と一緒に江戸に書を講じ、藩儒となるためのつてを求めてであろう、大学頭林家の門人になることを願ったが、許されず、その時の憤懣と自己の才能への自負とを詠じた作品が「九日」（三頁）である。

と推測する。

(二) 梁田忠山氏が簡略な注を付した『蛻巖集』、『同後編』に附録、忠山氏による「梁田蛻巖研究」を合わせたもの。

忠山氏の自筆原稿に基づき昭和三十四年謄写印刷本が出版されたが、本稿では平成八年黒田義隆氏の監修のもと、本立寺住職野口泰信氏により改めて発行された活字印刷本を用いる。ただし『蛻巖集』『同後編』については、近世儒家文集集成第五巻『蛻巖集』（ぺりかん社、一九九五）所収のものを用いた。

(三) ここでは『詞華集日本漢詩』所収の享保十六年版に拠

る。『停雲集』には作者名の下に簡略な紹介を付しており、

蛭巖の簡所には「梁田邦彦、字景鸞、東武人、號蛭岩、先世蓋総州名族也、景鸞少以材聞、歷事列國、官游不遂、身在窮阨、文章甚富」とある。なお京都大学附属図書館蔵の

一本（享保十六年版）には、いつ頃のものであるかは不明であるが、欄外に「一作繞荊扉」と朱の書き入れがある。

(四)「九日」詩以外にも「蕩子行送友人之京師」、「季夏奉寄東禪萬菴公五十韻」、「詠雪」など、後世代代表作と賞されるものを収めており、いずれにも『蛭巖集』に収めるものと異同が見られる。

(五)東京都梁田家蔵。『蛭巖梁田邦美』（兵庫県教育委員会、明石市教育委員会ほか、一九六五年）に写真を掲載する。

(六)『梁田蛭巖先生二百回忌記念誌』（梁田蛭巖先生顕彰会、一九五六年）所収。昭和三十一年東京都・文京区・斯文会共催の「先儒祭」にもなつて開かれた「先儒遺墨展」出品作品より梁田氏関連分を抄出したもの。

(七)新日本古典文学大系65『日本詩史 五山堂詩話』（岩波書店、一九九一年）所収。そのほか寛政十二（一八〇〇）年頃から起筆したとされる西島蘭溪『孜孜斎詩話』（同前所収）、天保七（一八三六）年刊津阪東陽『夜航詩話』巻一（『日本詩話叢書』龍吟社、一九九六年復刻再版 所収）などにおいても蛭巖を賞賛するが、「九日」には言及しない。友野霞舟編の大部のアンソロジー『熙朝詩薈』（『詞華

集日本漢詩』第四、六巻、汲古書院、一九八三年）には十番目に多くの詩が収められており、「九日」詩も含まれる。

(八)『続日本儒林叢書 詩文部』（東洋圖書刊行會、一九三二年）所収。

(九)『日本隨筆大成』第一期十六巻（吉川弘文館、一九七六年）所収。自筆本に基づいている。『駒谷銘言』の末尾には「天明二年秋九月」とあり序文も同年のものであるが、当該箇所は「詩談附録」として載せられており、末尾に「寛政五年癸丑春月改写」とあることから、天明二年以降寛政五年以前の成立と考えられる。自筆本以外にもいくつかの写本が伝えられている。なお後に掲げる山陽詩の注でも、承句の「登高能賦」を「登高作賦」とする。他の選集等で「作賦」に作るものは無い。これはおそらく、「登高能賦」では平仄が「平平平仄」となりやや不自然であるし第四句の平仄とも合わないため、自然と「作賦」として記憶してしまったと考えられよう。

(一〇)『大田南畝全集』第十巻（岩波書店、一九八六年）所収。『仮名世説』に引用していることについても、既に徳田武氏の指摘がある（『江戸詩人傳』ベリかん社、一九八六年）。二人の後補部分には、南畝の他著書からの引用もみられるという。なお解説で、五十八条「文学補」の石島筑波のことを述べて「われ年少時、筑波にも度々出会せり。なるほど名ほどのしるものにはあらず」と評した部分

をあげ、南畝、美成、文宝亭と筑波との年齢差を鑑みて「この文章の『われ』はまた別人という事になるう。」とする。しかし実はこの一条も『駒谷芻言』中の一文をほぼそのままに抜き出したものである。つまり「筑波（割り注略―引用者注）といふ儒者……何の難ぜざる事か有べき」（傍線引用者）までが『駒谷芻言』よりの引用であり（ただし『駒谷芻言』では傍線部を「何ノ難ズルコトカアラン」とする。『仮名世説』の文では意味が通らない）、それを「とある書にみえたり。」と受けているのであり、「われ」は松村梅岡のことである。

（一一）詩は以下の通り。

海雲裏日樹生風 海雲日を裏みて樹に風生ず
遙望津城跨晚虹 遙かに望む津城晚虹跨がるを
欲取新詩寫斯景 新詩を取りて

斯の景を写さんと欲すれば
已収梁叟錦囊中 已に収む 梁叟 錦囊の中

（『頼山陽詩集』巻廿三、制作年未詳）

後に触れる、『蘆藻集』に収める作品の多くは、この詩に次韻したものである。現在の所在は不明であるが、前掲（五）書に写真を載せる、山陽自筆と思われる原本には「過赤石追懷故蛻巖先生有此作」と題してこの詩があり、さらに「觀先生手書、依其韵賦此……」とする一律の後に「余誦先生詩、慕尚非一日、今過此地、不能不云云、聞令孫花痴

先生世業本藩、不墜家聲、余憶先生、而不可觀、猶冀見裔胄、因書此為介、詞翰之陋非所愧、幸勿見罪唐突」という（写真から判読不明の箇所については『梁田蛻巖全集』に収める梁田忠山「梁田蛻巖研究」の「諸名家評」掲載の翻刻に従った）。あるいは花痴（三代邦敬）の需に応じて作ったものだろうか。しかしこのほかにも「論詩絕句」以前の作に、『山陽詩鈔』には収めないが

長林缺處著瑤屏 長林缺くる処瑤屏を著く
下瞰晴潮浸落暉 下に瞰る 晴潮の落暉を浸すを
蛻叟題詩没奇語 蛻叟が題詩 奇語没す
唯言松杪一鳩飛 唯だ言ふ 松杪一鳩飛ぶと

（「與子登及竹田器甫遊箱崎戲作」）

『頼山陽詩集』巻十一、文政元年）

がある。これは『蛻巖集』巻四に収める「寄題筑大夫吉田氏觀海亭八景」の一つ「箱崎晴嵐」に

宮前燈火曉依微 宮前の灯火 曉に依微たり
祝史升堦露濕衣 祝史堦に升りて露衣を濕す
日出三竿空翠散 日出ること三竿 空翠散す
青松高處一鳩飛 青松高き処 一鳩飛ぶ

という結句を詠み込んだものである。なお山陽に遅れて九州を旅した星巖にも

忽憶蛻翁詩句好 忽ち憶ふ 蛻翁詩句の好きを
青松高處一鳩飛 青松高き処 一鳩飛ぶ

（「函崎廟」「星巖乙集」卷二）
の句がある。さらに山陽の「論詩絶句十四」には

萬卷撐腸筆有神 万巻腸を撐へて筆神有り

空疎何敢議前人 空疎何ぞ敢へて前人を議せんや

始知翰墨關時運 始めて知る翰墨の時運に関するを

文化何如正徳春 文化正徳の春に何如ぞ

（注）近日諸君、笑享保諸公詩爲陳腐

とあり、梅岡同様正徳を文雅の盛時とする。「論詩絶句」は『山陽先生遺稿』卷二に収める。

（一二）承句の「荊扉に近く咲く菊の花を愛でる」視線に対し、こちらは上へ向かう視線という対比があるのではないだろうか。

（一三）詳細は山本博文『対馬藩江戸家老近世日朝外交をささえた人々』（講談社、一九九五年）参照。

（一四）なお、より蛻巖に近いと思われる新井白石、益田鶴楼らの集中における用例は見いだせなかった。

（一五）豹隠公子については日野龍夫『服部南郭伝説』（ベリかん社、一九九九年）参照。

（一六）『三体詩』卷三に収める李嘉祐「送従弟歸河朔」に「諸將旌旄節、何人重布衣」の句がある。

（一七）『柴田蛻巖全集』所収。

（一八）『火後憶得詩』（『湖山樓十種』のうち）（『詩集日本漢詩 16』汲古書院、一九九〇年 所収）。

（一九）枕山の陸游詩からの影響については日野龍夫『成島柳北・大沼枕山』（岩波書店、一九九〇年）、驚原知良「大沼枕山の剣南体」（『待兼山論叢』文学篇第27号、一九九三年）などに既に指摘がある。なお「布衣尊」の語は、同時代の遠山雲如にも

悟後何求仙誕術 悟りて後何ぞ求めん 仙誕の術

眼前只識布衣尊 眼前只だ識る 布衣の尊

（『夏日寓居雜題』『雲如山人集』）

と、見える。

（二〇）直致は藩校敬義校を開校した人物である。

（二一）『薦藻集』下に、「老子乘牛圖并贊——蛻巖先生布衣讀書圖——富岡鉄崖 西京」とある。「鉄崖」は鉄斎が明治十五年前後に用いていた号である。

以上『徂徠集』『南郭先生文集』『蘭亭先生詩集』『金華稿刪』『觀海先生集』『星巖集』『枕山詩鈔』『雲如山人集』の引用は『詩集日本漢詩』（汲古書院）所収に、「頼山陽詩集」は『頼山陽全書』（図書刊行会、一九八三年）に、『後編鳩巢先生文集』は近世儒家文集集成第十三巻『鳩巢先生文集』（ベリかん社、一九九一年）にそれぞれ拠った。

（なかじま たかな・博士後期課程）